

司書合格体験記

文学研究科文化史学専攻 佐藤 悠

私はこの度、大阪市職員（司書）採用試験に合格し、4月より大阪市立図書館の司書として働くことになりました。ここでは合格までの一連の経験を述べていこうと思います。

司書の志望動機ですが、大学院に入学してから司書を進路として考えました。自分がこれまで学んだ専門知識を生かせる職業を考え、読書支援、調査支援、資料収集などを行う図書館、その専門職員の司書に魅力を感じました。そのため、大学院1年目の秋学期より司書課程を受講し始めました。

司書の採用試験は、国会図書館を含め近畿地方の自治体7ヶ所を受験しました。

採用試験は、公務員試験のいわゆる教養試験と司書の専門知識の試験が課せられます。教養試験については、特に数的処理などを中心に勉強しました。また予備校の模擬試験を受けて苦手な分野を把握して対策に結びました。最近は専門試験を課さずに面接を重視する試験が増えていますが教養試験を合格できるようにしっかり対策をしないとイケません。

専門試験については、『司書もん』（後藤敏行著、全3巻）を使用し対策をしました。問題数も多く、解説もしっかりしています。繰り返し問題を解いて、解説をしっかり読み込めば、専門試験の合格も難しくはないと思います。

面接試験についてです。

まず受験先の図書館を知ることから始まると思います。実際に見学・利用してみる、統計情報を読み解く、自治体について知る、ホームページを見るなどして、特徴や課題などをしっかり把握することが大事になります。また可能であれば、実際に働いている職員さんにOB訪問をお願いするのも大事かと思います。職員さんに直接質問することで、その受験先の図書館のことをより詳しく知り、志望動機などがより良くなると思います。

次に面接の対策です。これは事前の練習と場数を踏むことが大事になると思います。面接でよく訊かれる質問については、事前に答えをまとめておき、すらすら言えるようにしておくこと、実際に他者を交えて模擬面接をすることが重要になると思います。公務員試験の場合、民間の採用試験より面接を受ける機会が少ないので、事前の練習が重要だと思います。実際の面接では「自分はここの図書館で働きたい」という熱意をしっかりとアピールできるようにしておいてください。

同志社大学には学生勉強会のDUALISがあります。僕も大学院2年目から本格的に参加するようになりました。みんなで過去問を解いたり、図書館の問題について話合ったことは司書を目指すモチベーションに繋がっていたと思います。その他にも、日本図書館研究会のセミナーに参加したり、図書館総合展なども見学をしました。積極的に図書館について学んでいくことが重要になると思います。

簡単になりますが、以上のようなことをして採用試験に合格しました。司書を志望する方の参考になれば幸いです。

文学研究科文化史学専攻 水内 勇太

このたび、国立大学法人岡山大学より図書館職員の区分で内定をいただきました。内定にいたるまでの経緯をここに報告させていただきます。

私は、現在同志社大学大学院文学研究科の博士課程（博士課程後期）に所属しており、学部をあわせると、10年間、大学にて自身の研究を進めてまいりました。学部時代から研究者とな

ることを目標とし、就職活動も一切することなく研究に専念してきました。

しかし、修士課程2回生ごろから、大学外の共同研究会などに参加させていただくなかで、その過程で国立大学の図書館の職員の方に研究会のサポートをしていただくなどの経験を通して、その方の仕事ぶりや大学の研究に対する姿勢などに感銘を受け、このような仕事がしてみたいと強く思うようになりました。また、研究会の事務などの仕事を通して、研究者（教員、学生、アマチュア問わず）の活動のサポートをすることにやりがいを感じるようになったことも図書館職員を目指す理由の一つであるように思います。

一方で、自身の研究を進めていきたいという意欲もありましたので、博士課程に進学し、研究を進めつつ、博士課程1、2回生で同志社大学の司書課程を修了し、司書資格を取得しました。博士課程3回生からは、研究を進めながら図書館職員として働く道を模索するために、京都市内の私立大学の附属図書館の委託業務を行っている会社にアルバイトとして勤めはじめました。レファレンスカウンターでの簡単なレファレンスや学内ILL業務、貸出業務などが具体的な業務内容でしたが、現場の仕事の厳しさ、難しさを肌で体感することができました。しかし、研究、仕事、事務などの雑務のバランスをとる事が非常に難しく、いずれかに偏っては周囲の方々に迷惑ばかりおかけしていたように思います。

本格的に就職活動を行っていくことを決めたのは3回生の4月頃でした。館種にこだわらず就職活動を展開しようと考えていましたが、第一希望である国立大学法人を目標とし、7月の教養試験にまず照準を合わせてスケジュールを組みました。

教養試験対策としては、公務員試験に合格した大学院の先輩に連絡をとり、どのような勉強が必要かを伺った上で、テキストを参照して自分なりに対策を立てていきました。専門試験については市販のテキストと国立大学法人の過去問の二つを並行して勉強しました。実践を通して勉強することが近道だと思い、問題を解いてはテキスト、およびWeb上の情報で補足をしました。国立大学法人の過去問は一つのテキストではカバーできない問題も多く、補足の為に調べ物をするのに多くの時間を割きました。しかし、その調べる作業がより知識の定着に役だったのではないかと思います。

一方で5月、7月、9月と自身の研究の大きな学会報告、研究会報告があったため、その準備との兼ね合いも含めて、入念にスケジュールを組む必要がありました。5月の段階では1日3時間の教養試験対策、1時間の専門試験の対策を最低ラインとして自分に課し、研究、仕事、事務の合間に一定のペースで知識量と学力を蓄積していくことに努めました。月ごとに報告準備と教養試験、専門試験、面接対策を組みあわせ、上記の最低ラインを調整して準備を進めました。決して計画通りにはいかず、勉強も研究も仕事も失敗ばかりでした。全てが中途半端に終わってしまうのではないかと常に不安に駆られながら、勉強を進めていきました。

7月に実施された一次試験である教養試験は、比較的対策通りの問題が出たため、落ち着いて回答することが出来ました。120分40問と、回答時間が限られているため、自分にとって問題の難易度をしっかりと見極め、時間配分と正確に行う必要があるように感じました。9月に実施された二次試験である専門試験は、過去問をテキストとして勉強してきたため、対策通りに回答する事ができました。一方で、記述問題については対策が不十分で、添削などをしてもらえ人がいればより自信をもって回答できたのではないかと感じました。10月に実施された面接では、志望動機について尋ねられ、上記の志望に至るまでの過程を答えました。また、岡山が研究のフィールドである事、研究を通して情報検索能力、研究処理能力得ている事、研究補助等で研究支援・協力にやりがいを感じている事をアピールポイントにしました。研究補助の活動や意欲に面接官に関心を持っていただけたように思います。また、大学図書館でのアルバイト業務についても面接官に好印象を与えたように感じました。面接では、「こちらの図書館でこそ働きたい」という意欲と、「私こそこちらの図書館で活躍できる」というアピールをすることが肝要だと感じました。

内定通知を受けたときは、本当に何かの間違えではないかと思い、何度か総務課に電話をす

るなどしました。一次試験、二次試験、面接、いずれの準備期間も短く、準備内容も不十分であると感じていたため、まさか受かると考えていませんでした。研究、研究補助、仕事と、大学で10年間積み重ねてきた経験や知識や能力が結果に結びついたと思うと非常に感慨深く、10年間でお世話になった先生方、先輩方、研究仲間、職場の方々、友人をはじめとする皆様のおかげと強く感じます。

志望から内定に至るまで、比較的特殊な例ですので、司書課程に所属される学部生の皆様にはあまり参考にはならないかと思いますが、今後図書館員を志望される皆様の何か少しでもお役に立ててれば幸甚です。